

令和7年度保育所等障がい児保育担当保育士等研修

障がいの可能性がある子どもをもつ 保護者への支援 —前半—

大阪公立大学
現代システム科学域 教育福祉学類
木曾陽子

本研修のポイント

- ◆ 気になる子の保護者支援で、大切な視点を理解する
- ◆ 保護者が子どものニーズに気づき動き出すプロセスを理解する
- ◆ 保護者のプロセスに合わせた具体的なかわりについて理解する



出典:木曽陽子(2024)『気になる子の保護者支援—揺れ動く思いに応じた保育者のかかわり』中央法規出版

本研修の流れ

前半

- ◆ 保護者支援で大切な視点
- ◆ 保護者の気づきのプロセスに合わせた保育者のかかわり
 - ◆ プロセス1～プロセス2

後半

- ◆ プロセス3～プロセス4
- ◆ まとめ

保護者支援で大切な視点①

保育者は保護者の子育ての「伴走者」

- 一人ひとりのペースに合わせる
- 保護者の立場に立って考える
- 保護者も一人の「人間」

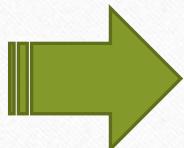


保護者支援で大切な視点②-1

- 子どもへの支援は保護者の気づきを待たずに行う
 - 「障がい」かどうかではなく、保育者が「気になる」と思った行動の背景を読み解き、それに合わせた支援をする
 - 園の中の複数の職員間で、その子の姿を多面的に見る

保護者支援で大切な視点②-2

- 子どものニーズに合わせた配慮を行う
 - 真に子どものニーズに合った配慮になっているかを意識
 - その先の育ちも見通して…



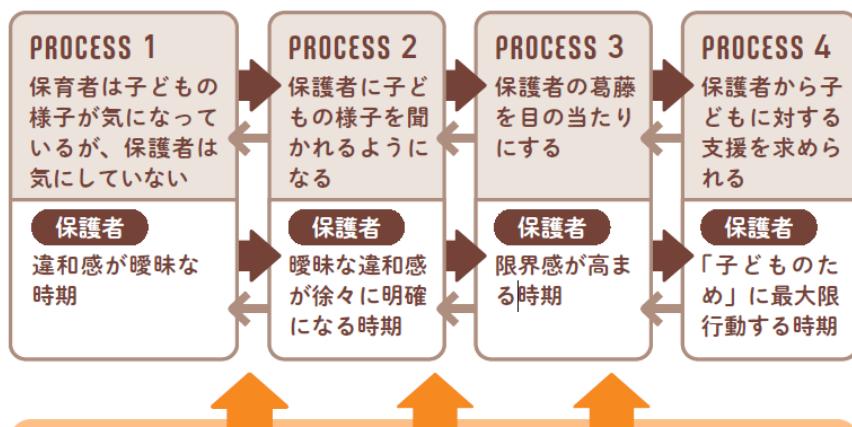
保護者の信頼につながる

保護者支援で大切な視点③

● 保護者への支援は組織的に行う

- 子どもの状況に応じて保護者に気づきをもたせ、親としての行動を「促す役割」⇒園長や主任(主幹)などの管理職
- 保護者の気づきにくさや悩み、葛藤などを理解し、揺らぐ保護者を「支える役割」⇒担任などの身近な保育者

保護者が子どものニーズに気づき動き出すプロセス



保育者が捉える保護者の姿

保護者の心情や行動

保護者は揺れ動き、
行きつ戻りつ
進んでいく

プロセスⅠの状況

保育者:子どもの様子
が気になっている

↔

保護者:気にしていない
ように見える

【よく見られる保護者の姿】

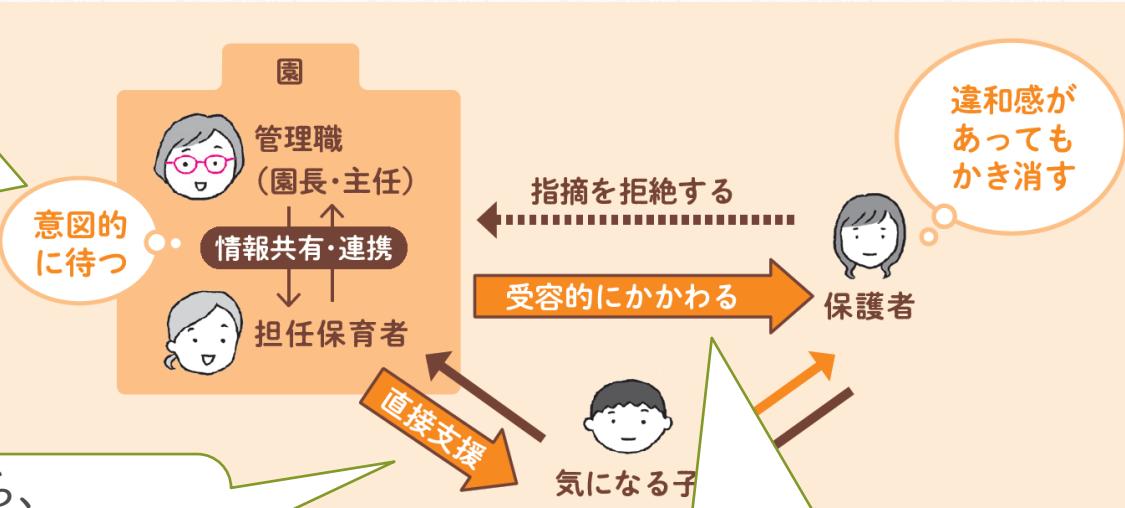
- ・子どもの発達について気にかけている様子が見られない
- ・保育者が子どもの発達に関する話をしようと避ける
- ・周囲から子どもの発達に関して話をすると怒り出す

プロセスⅠ：違和感が曖昧な時期

- 子どもの発達に関する違和感があってもかなり曖昧で、簡単にかき消すことができる
 - 保護者が行動を起こすまでには至らない
 - 子どもの発達に関する指摘に対しては、避けたり、拒否したり…

プロセスⅠの保育者のかかわりの基本

保護者の気づきや行動
を促すかかわりはせずに、
意図的に待つ



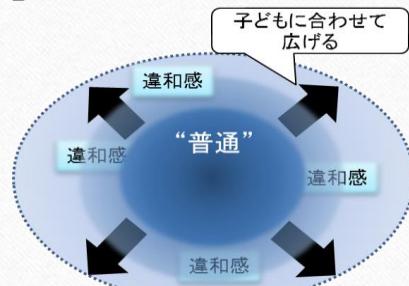
園でできることから、
子どものニーズに合わせた
直接支援を行う

日ごろから保護者に
受容的にかかわり、
信頼関係を構築する

プロセスⅠ：保護者的心情を理解する①

●曖昧な違和感はもっていても、理由をつけてかき消す

- 自然にいろいろな理由をつけて、「これは”普通”だ」と捉える
- ほかの子どもよりもよくできる姿が見られる
- 育てにくさを感じない場合もある
- 「障がい」と結びつけて考えることが難しい
- 「親の育て方のせい」や「親の問題」として捉えやすい



プロセス1：保護者的心情を理解する②

● 周囲の人から子どもの発達の課題を指摘されると拒絶する

- 子どもの発達への心配ではなく、自身の子育てへの評価として受け取る



プロセスⅠ：担任保育者のかかわり

● まずはじっくり信頼関係を築く

- 保護者側の気づきが見られないときは焦らず「待つ」
- 日ごろから挨拶や雑談、子どものかわいい姿を共有し、関係構築を目指す

● 子どもの支援は優先して始める

- 子どもの「障がい」の有無ではなく、行動の背景を理解
- 保育者の困りは園内の職員間で共有し、適切な支援を考える

プロセスⅠ：管理職のかかわり

- 保育者の困りをキャッチして、園内で支援体制を整える
 - 保育者の困りに早めに気づけるように常にアンテナを張る
 - 複数の職員で対応する体制をつくる
- 園全体に情報共有しつつ、自らも保護者に直接かかわる
 - 保護者のペースに応じたかかわり方を園で共有する
 - 管理職も直接保護者とかかわり、関係構築を目指す

プロセス2: 曖昧な違和感が徐々に明確になる時期

- 保護者に子どもの様子を聞かれるようになる



- ①子どもに対する違和感を周囲にこぼすようになる
- ②園での子どもの様子を何度も尋ねるようになる
- ③子どもの発達や「障がい」に関する情報を集める

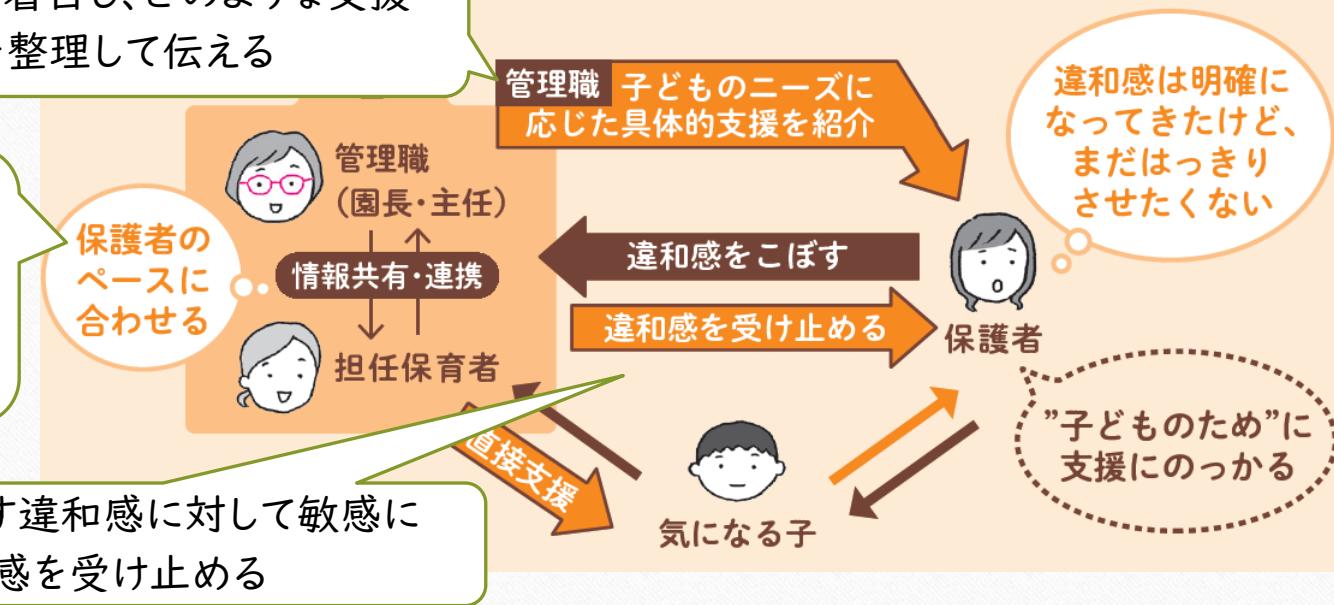
- 保育者が“子どもがどのようなことに困っているか”などを保護者に伝えると、専門的支援を受け入れることがある。

プロセス2の保育者のかかわりの基本

子どものニーズに着目し、どのような支援
が利用できるかを整理して伝える

保護者の不安や
心配に合わせて
具体的な支援の
方法を話し合う

保護者のこぼす違和感に対して敏感に
なり、その違和感を受け止める



①子どもに対する違和感を周囲にこぼす

プロセス2①：保護者的心情を理解する

● 「ほかの子と違う」違和感で不安や心配が高まる

- わが子がほかの子どもと少し違う行動をしていたり、様子が違っていたりすることを目の当たりにする



● 自分だけでは抱えきれなくて「こぼす」

- 保護者自身がほかの子どもとの違いを見たことで感じた「違和感」や「不安」を少しずつ周囲の人々に話す

「不安を解消したい」「安心したい」
&

「自分では不安をかき消すことが難しい」「心配が高まっている」

①子どもに対する違和感を周囲にこぼす

プロセス2①：担任保育者のかかわり

● 「大丈夫」はNG！まずは違和感を受け止める

- 保護者のこぼした違和感には、安易に「大丈夫」と言わない
- 「うちの子、〇〇ですよね」→「〇〇と思っておられるのですね」

● 保護者と子どもの様子を管理職と共有し、組織として対応する

- 管理職に保護者の違和感をこぼす行動を報告する
- 園での子どもの様子や支援の経過について、情報収集と整理を始める

①子どもに対する違和感を周囲にこぼす

プロセス2①：管理職のかかわり

- 管理職も保護者の様子を観察し、保護者の不安を受け止める
 - 管理職も日ごろから保護者とかかわり、保護者の話を聴けるように
- 園での具体的な支援方法を共有する
 - ほかの職員も、保護者に対して適切な支援ができるように。
 - 保護者の違和感がかなり明確である場合／担任が保護者とのかかわりに難しさを感じている場合
→管理職が直接保護者に声をかけて話すことも検討

園全体で
組織として
対応

②子どもの様子を何度も尋ねる、情報を集める

プロセス2②：保護者的心情を理解する

● 「障がいかもしれない」と気づき始めている

- 「今日はどうでしたか」と何度も聞く
- 送迎時に子どもの様子を観察する
- 障がいに関するパンフレットを持ち帰る



● 周囲の反応や自分自身の生活状況によっては違和感がまぎれる

- 周囲から「大丈夫」「心配しすぎ」などと言われる
- 家庭や保護者自身のそれ以外の問題（生活困難など）がある

②子どもの様子を何度も尋ねる、情報を集める

プロセス2②: 担任保育者のかかわり

● 子ども目線で子どもの困っていることを伝える

- 「うまくいったこと」と「難しいこと」の両方を伝える
- その場ですぐに伝えられない場合には、保留にして作戦会議を

● 相談の場に誘う

- 無理強いしない範囲で相談の場に誘いかける
- 事前に場をセッティングする

②子どもの様子を何度も尋ねる、情報を集める

プロセス2②：管理職のかかわり

● 保護者と直接話をする

- 保護者の意思を尊重して誘う
- 子どものニーズを中心に話し合う

● 利用できる具体的な支援や制度を紹介する

- 加配制度
- 療育（児童発達支援）



令和7年度保育所等障がい児保育担当保育士等研修

障がいの可能性がある子どもをもつ 保護者への支援 —後半—

大阪公立大学
現代システム科学域 教育福祉学類
木曾陽子

プロセス3： 保護者の限界感が高まる時期

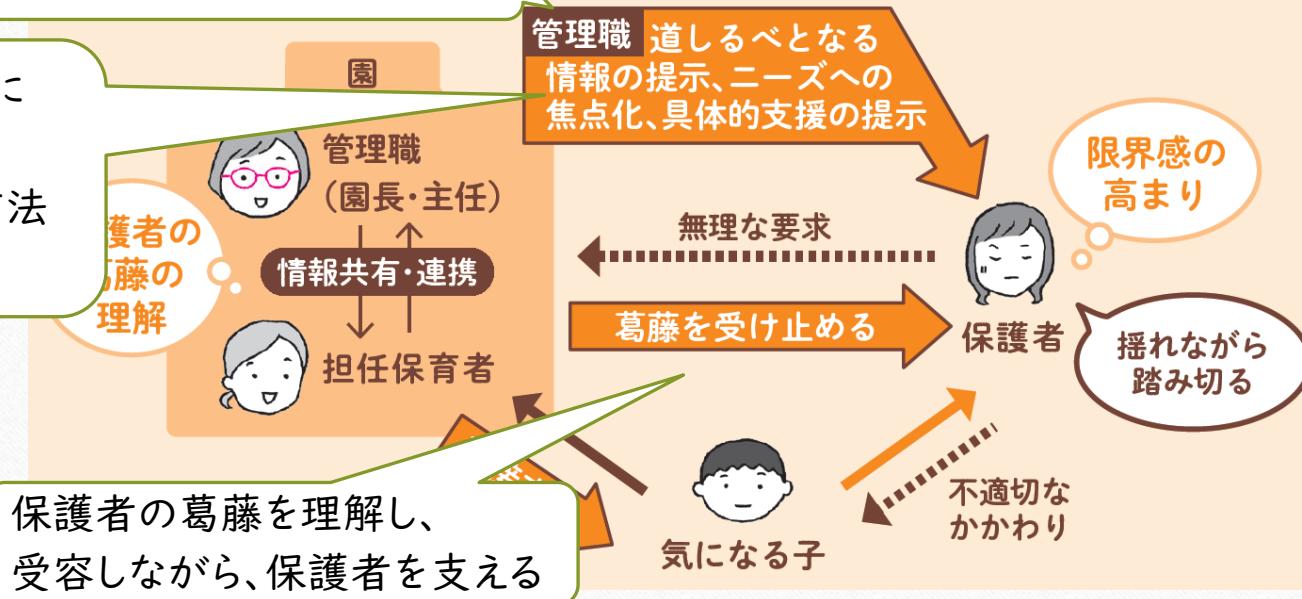
● 保護者の葛藤を目の当たりにする

- 
- ①医療機関などの専門機関を探し始めたり、受診したりする
 - ①障がいの診断にこだわる
 - ②子どもを叱りつけたり、子どもの苦手なことを無理にやらせようとする

プロセス3の保育者のかかわりの基本

必要に応じて専門機関等の情報を提示する

子どものニーズに
焦点を当て、
具体的な支援方法
を共に考える



①医療機関などを探し出す、診断にこだわる

プロセス3①：保護者的心情を理解する

● いよいよ「障がい」を明確に疑い始める

- 子どもの姿と「障がい」が切り離せなくなっていく
- どっちつかずの状態が余計に不安…

● はっきりさせたいが「障がい」と決まるのは怖い

- 子どもへの不適切な対応や保育者に対する無理な要求につながることも
- 診断の有無にこだわったり、どの診断かにこだわったりすることも



①医療機関などを探し出す、診断にこだわる

プロセス3①：担任保育者のかかわり

● 保護者の気持ちを聴きとる

- 保護者の気持ちの揺らぎに流されすぎず、つながり続ける
- 保護者の気持ちに流されないように、保育者自身の気持ちを自覚する



● 管理職に状況を報告し、専門機関の紹介を検討する

- 身近な専門機関を調べ、管理職につなぐ
- 保護者が専門機関等に受診した後は、声をかけて気持ちを聴く

①医療機関などを探し出す、診断にこだわる

プロセス3①：管理職のかかわり

● 担任一人に任せず、保護者と直接かかわる

- 担任が精神的に追い詰められないようにフォローする
- 管理職も保護者に積極的にかかわり、保護者の葛藤を受け止める

● 保護者に具体的な専門機関を助言する

- 保護者が具体的な情報を得られるよう、パンフレットなどを用意する
- 保護者が自ら選んで一歩踏み出せるように支援する

②吐りつけたり、無理にやらせようとする

プロセス3②：保護者的心情を理解する

- 「障がい」に対する葛藤が子どもへの不適切な行動につながる

- 「障がい」に強くとらわれてしまう
→障がいをなくしたい、治したい…



- 園に対しても、子どもにとって不適切な対応を求める

- 「他の子と同じようにさせてください」など子どもの実態に合わない要求
※保護者の言動よりも、その奥にある焦りや不安と向き合う

②吐りつけたり、無理にやらせようとする

プロセス3②：担任保育者のかかわり

● 管理職に報告し、保護者には冷静にかかわる

- 子どもと保護者の様子を丁寧に観察し、管理職と共有する
- 保護者を批判せずに、葛藤を理解する

● 保護者との関係もふまえて、子どもへのかかわりを検討・実践する

- 保護者のニーズもふまえつつ、子どもに対して園でできることを考える
- 子どもに不安定さがみられる場合には、子どもが園では安心して過ごせるようかかわる

②叱りつけたり、無理にやらせようとする

プロセス3②：管理職のかかわり

● 子どもへの支援のフォローも検討する

- 子どもへの支援を手厚くし、担任をフォローする
- 保護者に対して「障がいかどうか」→「子どものため」へのシフトチエンジを図る

● 深刻化した際の対応をチェックする

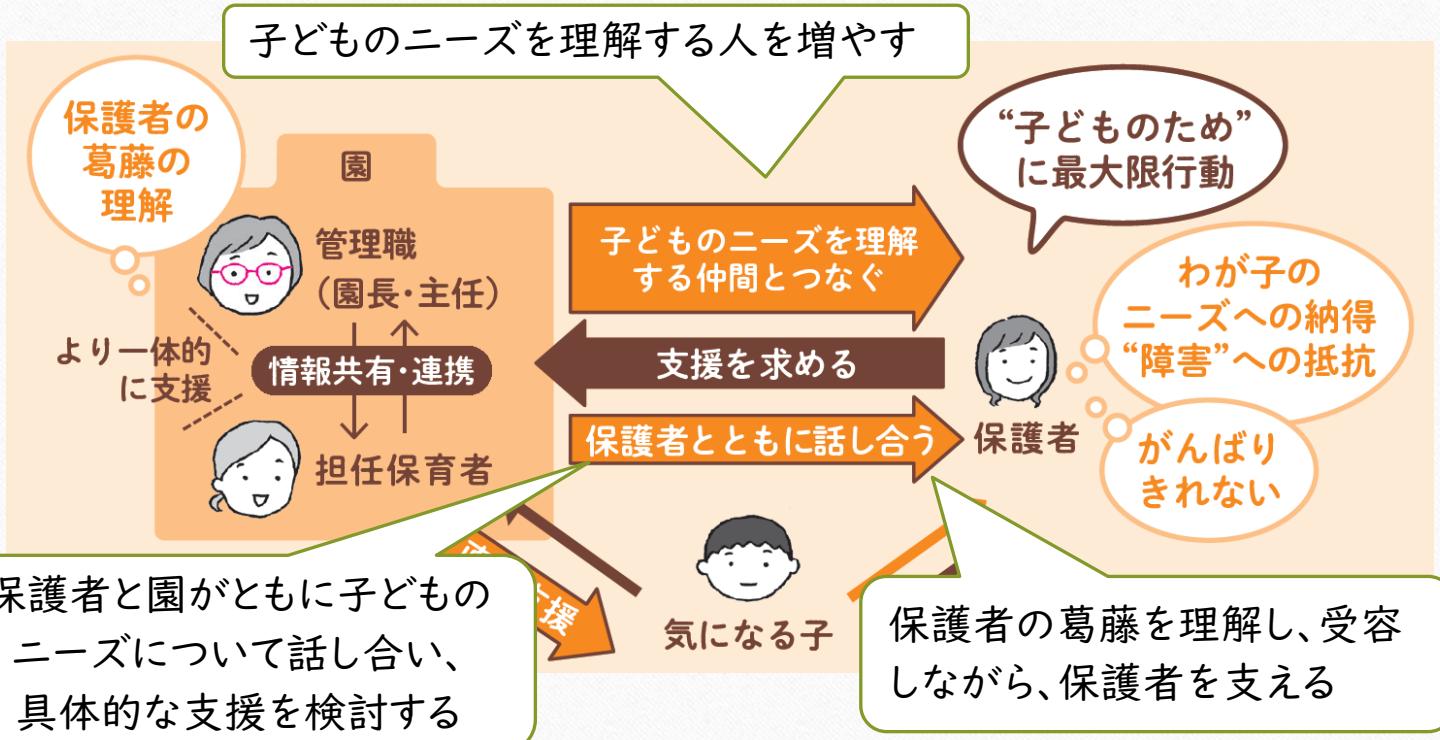
- 保護者や子どもの様子の変化を意識して観察する
- 虐待の兆候があった場合には、関係機関に情報共有・相談する

プロセス4: 保護者が「子どものため」に最大限行動する時期

● 保護者から子どもに対する支援を求められる

- 
- ①園での子どもの様子を詳しく聞いて、積極的に子どもの支援を求める
 - ①家庭での子どもへの支援を積極的に行う
 - ①さまざまな勉強会に参加し、専門的な知識を得る
 - ②子どもに厳しく接したり、いろいろなことをさせすぎたりしてしまう

プロセス4の保育者のかかわりの基本



①積極的に子どもの支援を求めたり、勉強したり…

プロセス4①：保護者的心情を理解する

● 「子どものため」モードに切り替わる

- 保護者自身の葛藤を押しやり、子どものためにすべきことを優先する
- 親としてできることは何でもやろうと積極的に動き出す



①積極的に子どもの支援を求めたり、勉強したり…

プロセス4①：担任・管理職のかかわり

● さまざまな情報を収集し、整理する

- 保護者と園での様子を共有し、家庭での様子も聞き取る
- ほかの専門機関からも積極的に情報を集め、個別の支援計画を活用して整理する

● 園でできる支援を保護者とともに考える

- 子どもの理解を深め、個別の指導計画を作成する
- 支援を実施し、共に振り返る

②子どもに厳しく接したり、いろいろやりすぎたり…

プロセス4②：保護者の心情を理解する

● 「障がい」を受け入れたわけではない

- 子どもができないことや苦手なことに直面して落ち込む…

● 周囲の理解をあきらめてしまう

- 「障がい」→自分と周囲の人は違う…話せない
- 家族との温度差に1人で抱え込んでしまう



②子どもに厳しく接したり、いろいろやりすぎたり…

プロセス4②：担任保育者のかかわり

- 子どもの姿を誠実に伝えつつ、子どもの育ちを信じる姿勢をみせる
 - 「できた」「できない」という視点だけで見るのでなく、その子どもの違いを良さとしてとらえていくことや、その子なりの成長を見つけていく
- 保護者がゆとりをもてるような家庭でのかかわり方と一緒に考える
 - よりよくかかわることを求める前に、保護者をねぎらう
 - 保護者が保護者自身を大事にすることに目を向ける

②子どもに厳しく接したり、いろいろやりすぎたり…

プロセス4②：管理職のかかわり

● 似た経験をもつ保護者や同じ立場の保護者とつなぐ

- 親の会やペアレント・メンター、ペアレント・トレーニングなど、同様の立場の保護者同士がかかわれる場を紹介

● 保護者の気持ちや経験をほかの保護者や地域に伝えていく

- 似た悩みをもつ保護者同士をつなぐことで、保護者がつながり合い、支え合える場をつくる

演習：事例をもとに考えてみましょう

4歳児クラスのFちゃんは、なかなかお友だちとの関係がうまくいきません。友だちの嫌がることを平気で言ってしまい、いくら責めても自分が悪いことが分からぬようです。また、こだわりが強い様子が見られ、泥が触れないなど、感覚の過敏さも見られます。しかし、まだ専門機関にかかるおらず、Fちゃん自身に障がいがあるかどうかはっきりしていません。

ある日のお迎えのとき、担任保育者がお母さんに「Fちゃん、今日もYちゃんとケンカになってしまって、叩いてしまったんです。」と話をすると、担任とは目を合わせず「Yちゃんのお母さんには、謝りの電話をしておきます！先生もケンカになる前に止めてください！！」と言い放って、走り去って行きました。

事例検討をしてみましょう

①なぜ保護者は走り去ってしまったのでしょうか？保護者の気持ちを想像してみましょう。

②Fちゃんの保護者に対して、園全体でどのような対応を行うか考えてみましょう。



事例：気になる子どもの保護者

- 早期発見・早期療育だけがすべてではない
 - 保護者の思いや状況を見て、話をしていく
 - 認めにくい場合は、園での対応を丁寧に
- 客観的な情報収集を
 - 家での様子はどうなのか？園での様子は？
 - その前に保護者とは日ごろから話をしやすい関係を

保護者の言動の裏
(奥)にある思いや
背景の理解に努める

まとめ①：本研修のポイント

◆ 気になる子の保護者支援で、大切な視点を理解する

→「伴走者」になるために…

- 保護者のペースに合わせる（プロセスの理解）
- 保護者の立場で考える（一人の人間としての理解）

→子どもの支援から先にはじめる

- 複数職員で子どもを多面的に見る
- 子どものニーズに合わせる

まとめ②：本研修のポイント

- ◆ 保護者が子どものニーズに気づき動き出すプロセスを理解する
- ◆ 保護者のプロセスに合わせた具体的なかかわりについて理解する
 - プロセス1：曖昧な時期は、意図的に「待つ」
 - プロセス2：保護者からの「こぼす」を逃さない→ニーズに沿った支援へ
 - プロセス3：葛藤が大きい時期は、嵐に巻き込まれない「いかり」になる
 - プロセス4：保護者と関係機関と連携をはかって具体的な支援へ

保育者一人で抱え込まず、園全体で組織的な支援を…